現代日本に転生したと思ったら、ペルソナ5だった。

ずばば

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んでまた現代日本に生まれたと思ったら、ペルソナ５の世界でした。気づいた時には高校生。巻き込まれないように・・・ と思いつつも、巻き込まれてしまう主人公の話。

目次

ペルソナ5の世界だと気づいてから ―― 1
平穏な学校生活の終わり ―― 4
主人公との出会い ―― 12
意志の化身 ―― 20
反逆と猫と ―― 28
現実への帰還 ―― 35
これからのこと ―― 42
迫るタイムリミット ―― 51

ペルソナ５の世界だと気づいてから

多分、俺は１度死んで、生まれ変わったのだろう。
多分というのは、自分の死因や、死ぬ前のことがあまり鮮明に思い出せないからだ。一人っ子で趣味はテレビゲーム、学生時代は友達と家に集まりゲームをして遊び、社会人になってからも月に１本はゲームを買い、家に帰ってからゆっくり遊んでいた・・・ その程度の記憶は残っているものの、家族や自分の名前、友達は何人いたのか、恋人はいたのか。そんな事が思い出せない。
昔は何とか思い出そうと毎日のように悩んでいたが、時が経つにつれその執念も冷めていき、今ではあまり気にしないことにしている。
そんなこんなで今は１６歳。先程言った通り大した記憶も残っておらず、学力や運動能力で周りと大きな差がつくこともなく、平凡に高校生活を送っている。
・・・ 送っている、のだが。
１つ、大きな問題を抱えている。
それは、この世界が恐らく「ペルソナ５」というゲームの世界だという事だ。
ペルソナ５。それは、世の中の理不尽に悩まされる高校生の主人公とその仲間が、ペルソナという不思議な力に目覚め、「怪盗団」として心の世界に入り込み、悪い大人達を改心させて行く。ざっくり言えばそんなゲームだったはずだ。
これに気づいたのは、中学時代に親と担任教師から勧められた高校が「秀尽学園高校」だった時だ。
あまりにもインパクトのある学校名だったためか、自分の記憶にも残っていた。
秀尽学園高校、通称「秀尽」は主人公達が通う学校であり、ペルソナ５において様々な事件に関わる場所でもある。
そんな場所に通うことに好奇心が湧かないでも無かったが、それ以上に事件に巻き込まれたくないという思いが強く、最初は別の高校に

したい、と希望した。が、家から近いことや、親と学校の勧めを断れるほどの理由も思いつかず、結局秀尽に通うことになってしまった。
とはいえ、大人しくしていれば主人公達と関わることもないだろうし、別に問題ないか。と、割と楽観的に考えてもいた。
そしてそのまま入学。入学式を終え、クラス内での簡単な自己紹介も終わり、今日は簡単な説明を受けてさぁ帰るか、という時のことだった。
「なぁ。」
と、前の席から声がかかった。声をかけられた方を向くと、髪を金色に染めた、短髪の少年がいた。
「悪い、明日持ってかなきゃなんねー物聞いてなかった。知ってたら教えてくんね？」
頼む！と言いながら手を合わせてこちらに頭を下げる。
特に教えたくない理由も無かったので、
「あぁ、いいよ。確か、明日必要なのは・・・」
そう言って、覚えていることを教えてあげた。
そして教え終わると、
「なるほど、おっけー分かった！教えてくれてサンキューな！」
と言い、
「もし良かったらさ、連絡先交換しとかねーか？今後もこういうことあったらさ、教えて欲しいんだよな。」
教えてもらうの前提かよ。と思わないでもなかったが、折角の交友を広げるチャンスだと思い、頷いて承諾した。
そして連絡先を交換して、登録された名前は
坂本竜司、だった。
坂本竜司。それはペルソナ５の世界における、主人公の相棒的キャラクターだったはずだ。ヤンキーのような見た目で敬遠されたりもするものの、根は優しく正義感もあり、怪盗団のムードメーカー的役割を担う人物。
巻き込まれないように、と思っていたのに。先に名前を聞いておけばよかった。そういえば俺の名前　司馬　海人《しば　かいと》でさ

行だし、警戒しておけばよかった。などと後悔してる間に、坂本はじゃ、また明日な！と言って教室を去っていった。

・・・　とりあえず、帰ってから考えよう。

現実逃避をして、とりあえず俺も帰ることにした。

平穏な学校生活の終わり

そのまま家に帰宅し、自室のベッドで寝転んだ。
天井を見上げながら、これからのことを考え始める。
このままだと最悪、原作の事件に巻き込まれるかもしれない。巻き込まれるだけならいいが、もしパレスにまで引っ張られるハメになれば、大した意志もなく生きている俺は間違いなくペルソナの力になんて目覚めることは無いだろうし、シャドウと戦うことになれば命を落とす可能性だってあるだろう。
折角拾った2回目の人生を捨てたくはない。出来るだけ原作には介入しないようにしなければ。
まず、坂本との関係はどうするか、ということだ。これに関してはこちらから積極的に関わら無ければ問題ないはずだ。この後坂本は陸上部に所属して、友達もそれなりに出来るはず。こちらから関わらなければ、徐々に坂本の意識からも無くなっていく・・・ と思う。
次に他の怪盗団メンバーについてだ。とは言っても学年の違う新島真や奥村春、学校の違う喜多川祐介なんかとはこちらから関わらなければ特に何が起きることも無いだろう。
だとすれば、問題は同学年の高巻杏と主人公だろう。
主人公は確か2年になってから転校して来るはずで、冤罪を受けて周りから避けられていた筈だ。少し可哀想ではあるが、こちらから避けたとしても特に不自然ではないだろう。
そして高巻杏だが・・・ 確か坂本とは中学時代からの同級生だったはずだ。坂本からの繋がりで接触する可能性はあるかもしれない。
逆に言えば関わる可能性はそれくらいで、坂本とあまり関わらなければ特に関わることもないだろう。クラスの名簿を見たところ、幸いにも別のクラスのようだ。
とりあえず大まかな方針を決め、適当に風呂と夕飯を済ませて早めに寝た。
次の日。
秀尽は歩いて通える距離にあるため、少し遅めに家を出て、学校ま

で歩いた。
学校まであと半分くらいの距離で
「おーーーい！」
という後ろからの大声に驚き、思わず振り向く。
後ろから坂本が手を振りながら走ってきていた。
まずい。と思ったがどうすることも出来ず、そのまま坂本が追いつき話し始めた。
「昨日はありがとな。お前も今から学校行くとこだろ？一緒に行こうぜ！」
こういう時、スパッと断ることが出来る性分ならどんなに楽だったか。なし崩し的に一緒に行くことになってしまった。
陸上部に入れば陸上部の友達と登下校するだろうから、問題ないはず。と自分に言い聞かせながら、学校へと向かっていく。・・・ 問題ないよな？
そうして他愛もない話をしていると学校に着き、授業が始まる。今日は簡単な授業が行われた後、部活動の見学があるようだ。
何となく察していたが、坂本に一緒に見学に行こうぜ！と言われ、当然断れず一緒に部活動を見に行くことに。
坂本は一直線に陸上部に行き、活動内容を聞く前から入部届けを書いてその場で出していた。・・・ 見学に行かなくてもよかったんじゃないだろうか。
お前はどの部活に入るんだ？と聞かれたが、そこまで入りたい部活動も無かったし、バイトをして自分のお金を作りたいと思っていたので、
「俺はバイトするつもりだから、部活動には入らなくてもいいかな。」
と坂本に答え、そっかーと坂本が返事をして、その場で解散した。
・・・ まぁ、これで坂本は部活動に入って友達を作るだろうし、俺のことも忘れていくだろう。そう思っていた。
が。
その次の日にラーメン屋に連れていかれたり、また別の日には

シューズの買い物に付き合わされたりと、一向に俺との関係が切れる気配がない。それどころか、どんどん仲良くなっている気がする。
非常にまずいとは思っているが、坂本と話す時間は心地よかったし、あいつの誘いを断るのも気が引けた。
まぁ、主人公と関わらなければ大丈夫だろう。とやや強引に結論づけ、今では普通に話したり遊んだりする関係になってしまっている。
ある時、なぜ俺と友達でいようとするのだろうと疑問に思い、聞いたことがあった。坂本は明るく誰とでも仲良く出来るタイプだと思う。わざわざ俺と関わらなくても、もっと口数が多かったり、話の面白い人と関わればいいのでは。そう思ったからだ。
すると坂本は考えながら、
「そりゃーお前、あれだよ・・・ あれ。」
「なんつーか・・・ そう!友達になるのに理由はいらねーからな!」
と、いまいち答えになってない答えを自信満々で言った。
その時のドヤ顔がおかしく感じて、思わず吹き出してしまった。
「あ!お前笑ってんじゃねーよ!」
坂本が不服そうにこっちを見てくる。
多分、こいつは理屈とか、損得で考えてないんだろう。それがきっと坂本のいい所で、彼の居心地の良さを形作っているのだろう。そう思った。
そんなこんなで結局、時々一緒に遊んだりしながら、何ヶ月かの高校生活が過ぎていった。
そんなある日。
放課後、今日はバイトも無いし、坂本の様子でも見に行くか、と陸上部のグラウンドまで歩いて行った。
すると、陸上部の方から坂本の怒鳴り声が聞こえてきた。驚いて、急いでグラウンドへ走った。
「てめぇ・・・ もういっぺん言ってみろ!」
坂本が物凄い形相で、教師を睨んでいた。
睨まれている教師は確か・・・ 鴨志田。
そう、鴨志田だ。ペルソナ5における、最初の事件の犯人。バレー

部に体罰を行い、女子生徒に手を出し・・・ 坂本を陸上部から退部にし。暴力事件として大袈裟に広め、坂本の居場所を無くし。・・・ 坂本の足を潰した男。

坂本はよく、鴨志田の愚痴をこぼしていた。

・・・ 止めるべきか？

坂本はおそらく、このままだと鴨志田を殴るだろう。そうなれば彼は退部になり、学校からの居場所も無くなる。

だけどそれで終わるわけじゃない。主人公と出会い、結果的に鴨志田の事件を解決して、怪盗団として新しい仲間と人生を歩む。

だから・・・ このまま黙って見ていればいいのだろうか？

しかし、止めれば俺の居場所が無くなるだろう。鴨志田はゲーム内でも、前科持ちとして主人公の悪い噂を広め続けた。自分に歯向かう可能性があるやつを、徹底的に潰すのだろう。

だから・・・ 今動かないのはしょうがない事なのだろうか？許されることなのだろうか？

頭の中で思考がぐるぐると回る。考えている間にも鴨志田は坂本の家族のことを罵り、さらに坂本の怒りを強くしていく。

止めるな。見捨てろ。巻き込まれたくない。

黒い考えが頭に渦巻いていく。これで坂本を見捨てれば、友達としての関係もすっぱり辞めれるかもしれない。そうなれば、もう巻き込まれる心配もない。

「てめぇ!!」

坂本が鴨志田に向けて走り出して、拳を振りかぶって、ニヤけた顔の鴨志田に向けて

拳が振り抜かれる前に、俺が鴨志田の頬を殴った。

「・・・ は？」

呆気に取られたように鴨志田が口を開く。

「お前・・・ 海人・・・ なんで・・・」

絞り出すように、我に返った坂本が声を出した。

やってしまった。これで、俺の学校生活は終わるかもしれないな。

そう思ったが、それほど後悔はしていない。やりきった顔でざまぁみろ、と言わんばかりに鴨志田に笑ってやると、顔がみるみるうちに赤くなり、こちらを睨みつける。
「貴様ァ!!!」
怒鳴り声を上げ、俺のみぞおちを殴ってきた。
ぐぇっ、と潰れた声を上げながら、その場に倒れた。
「あと少しという所で！お前は！このクソガキが!!」
続けざまに声を荒らげ、俺を強く踏みつけ続ける。
流石運動部顧問というべきか、蹴りが重い。踏まれた所が青くなっていく。
俺のことを殺す気なのではないか、と言わんばかりのあまりの迫力に、近くにいた陸上部員達の顔は真っ青になっている。
痛い。人生で味わったことの無い苦痛だ。
・・・いや、1度目の人生では死んだわけだから、これ以上の苦痛を味わっているのだろうか。
朦朧とする意識と鋭い痛みの中、現実から目を逸らすように思考を続ける。
意識が遠のく中で、
「やめろ!!!」
という坂本の叫び声の中、俺は意識を手放した。

次に目が覚めると、俺は白い天井を見上げていた。
「お！起きたか！」
横から坂本の声がする。
辺りを見回す限り、どうやらここは病院のベッドのようだ。
スマホの時計を見ると、今は7時頃のようだ。
鴨志田のことを殴って、ボコボコにされた所までは覚えている。その後はどうなったか。坂本に聞いてみる。
すると、坂本はどこか申し訳なさそうに、話し始めた。

簡潔に言えば、坂本はあの後俺を蹴り続ける鴨志田を止めるため、殴りかかったらしい。それを待っていたと言わんばかりに鴨志田が騒ぎ立て、周りの教師を呼んだ。坂本が暴力を振るった。そう言って。暴力事件を起こした生徒として、親と学校に広められた。

ついでに、俺の怪我は全治1週間だそうだ。それほどかからないみたいで良かった、と思うべきだろうか。

「・・・ お前は、俺を止めるために鴨志田を殴ってくれたのに。ごめんな。」

「でも、友達が殴られてるのを見て、黙って見てるなんて出来ねぇ。どうしても、止められなかった。」

事の顛末を話した後、坂本は怒りと謝意を滲ませながら、俯きがちにそう言った。

正直、坂本に対して怒る気持ちはない。俺が勝手にやって、勝手に殴られただけのことだ。むしろ、坂本が手を出す程に怒ってくれたことに、嬉しい気持ちさえあった。

「気にするな。」

「怒ってくれて、ありがとう。」

こういう時、気の利いたことが言えない自分が恨めしい。とにかく、気にしていないことと感謝の気持ちを伝えるために、そう言った。

坂本は驚いた顔をした後、

「!・・・ おう! いいってことよ!」

そう言って、ニッと笑った。

やはり明るい方が坂本らしいな。

その後、坂本とはこれからのことを話した。

「多分、鴨志田はこの事を学校中に広めるぜ。暴力事件を起こした2人、ってな。」

「俺らは明日から不良扱い。お前なんて、あんなに殴られたってのに・・・ ふざけんじゃねぇ。」

「でも、あいつは元オリンピック金メダリスト、そんでもって自分のバレー部を全国にまで行かせてる。教師の連中は、あいつが何言っても首を縦に振るんだ。お前の怪我のことも、事故だとかなんだとかで丸

め込まれちまう。」
悔しそうに、坂本はそう言った。
まぁ、やはりそうなるだろう。ゲーム内での鴨志田も相当な悪事を働いていたが、周りから咎められるようなことは一切無かった。
覚悟していたからか、これといった悔しさや怒りは無かった。
「俺も陸上は続けられねーだろうし、親になんて言ったらいいんだろうな。」
ため息がちに呟いた。坂本は陸上で親に恩返しをしようとしていた。しかしこの1件でそれも不可能になっただろう。
俺は坂本のようにひとつの事に夢中で打ち込んでなどいない。せいぜいこの事件で怪我を負って、学校に居場所が無くなる程度だ。怪我なんてそのうち治るし、友達は元々大していない。
「なら、俺とお前の親にちゃんとあった事を伝えよう。」
俺は坂本にそう言った。驚いた顔をした坂本に構うことなく続ける。
「お前は正しいことをしたと、俺は思う。悪いのは鴨志田だし、それをお前が気にする必要なんてない。」
「だから、ちゃんとあったことを伝えよう。お前の親だって、本当のことが知りたいはずだ。」
「あと、俺に申し訳ないと思うなら・・・ 退院したら、萩窪のラーメンでも奢ってくれ。トッピングも合わせてな。」
言い終わると、坂本は少し考えた後、
「・・・ そうだな。そうする。ちゃんと何があったか、親には知ってもらいてぇ。・・・ ありがとな。」
と言い、続けて
「ていうかお前、いつもラーメンのトッピングめちゃくちゃつけるじゃねーか！俺はバイトしてる訳でもねーのに、いくら払わせるつもりだっつーの！」
と言って笑った。
とりあえず、坂本の悩みはある程度解消されただろうか。
俺も親に伝えなきゃな、と考えていると、

「そうだ、この機会だから言っておくけどよ。お前俺のことちゃんと名前で呼べよ！こんだけの事件起こしちまったんだから、もうただの友達でもねーだろ？」
笑いながら言った。そういえば坂本の事はずっと苗字で呼んでいたな。
「分かったよ、竜司。これからもよろしく。」
そう言うと、おう！と言って、その後しばらく話した後、竜司は病室を出ていった。
今思い返してみると、本当にやっちゃったなぁ。このままだと主人公とも関わることになるのは間違いなさそうだ。
ま、仕方ないか。そう考えて、とりあえずはもう一度寝ることにした。
ちなみにその後親に電話したが、まるで心配されていなかった。「事なかれ主義のあんたが暴力事件起こすなんて、どうせ相手が悪いんでしょ？」だそうだ。話が早くて助かるような、もっと心配してくれ、と思うような。

主人公との出会い

1週間後、俺は無事退院することが出来た。入院中も毎日竜司が病室に来てくれたこともあって、退屈はしなかった。

予想通り、鴨志田が噂を広めて竜司は学校ではやや孤立してしまっているらしい。更に、竜司の一件から難癖をつけられて、陸上部は無くなってしまったようだ。

ゲームの通りではあるが、全国大会に出場させたというだけでよくもまぁそこまでの権力を手に入れられるものだ。と、不謹慎にも少し関心してしまった。

陸上部が無くなることは竜司も予想していたようで、部員達に負い目を感じている様子だった。

しかし、話を聞く限りだと、原作ほど部員達との仲は悪くなってはいないようだ。

これについては、何となく理由は思い当たる。原作では、すごく意地の悪い言い方をすると、怒りを抑えきれなかった竜司が手を出してしまい、部活動を解散させた、という状況だったはずだ。

しかし今回の竜司は、友達が殴られているのを助けるために思わず手を出してしまった形で、部員達もさすがに責めるのは気が引けるのだろう。

そのお陰もあってか、元陸上部とは今でも話すくらいの仲ではあり、その影響で原作ほど周りから孤立はしていないようだ。

比較的孤立していない理由は他にも思い当たる。竜司自身が母親と今回の暴行事件の真相を話したことだ。俺が退院してすぐに提案し、2人で話に行った。ついでにその時、竜司が母親のために努力してきたことを、竜司の母に話した。

その時の竜司の母はよく話してくれた、頑張ってくれてありがとうと、泣きながら竜司に話していた。それを聞いた竜司も、同じように泣いていた。

その後、竜司には本当に何度も感謝された。最近はよく竜司に感謝される気がする。

そんなことがあって、竜司は特にグレたり態度が変わることもなく、いつものままの明るさで過ごせている。そのお陰で、変に周りから毛嫌いされていないのだろうな、と思った。
そんなこんなで今日は学校がまた再開する日。周りから避けられることは目に見えてるし、少し憂鬱になりながらも家を出た。
途中で竜司と合流し、話しながら道を歩く。周りの秀尽生は、こちらを見てヒソヒソと話をしている。おそらく、というか間違いなく暴行事件に関する話だろう。分かっていたものの、あまりいい気分ではない。とはいえいちいち突っかかってもしょうがないので、気にしてないフリをしてそのまま学校へと向かった。
校内を歩き、そのままクラスに入って席に着く。やはりクラス内でも噂話が絶えない。さすがにうんざりして、ため息が漏れる。
とは言え、それ以上の事はしないようで、普通に授業が始まり、特に何も無いまま昼休みの時間になった。
購買で急いでパンを買ってきて、クラスに戻ろうとすると、
「やべ、飲み物買うの忘れてた。わり、先に行っててくんね？」
そう言って竜司は自販機の方へと駆け出した。
やや肩身の狭い気持ちの中、1人でクラスの方へと歩いていると、偶然にも鴨志田と出くわした。
「おやおや、君は俺に暴力を振るった司馬君じゃないか。」
皮肉の込められた笑みを浮かべ、鴨志田が言った。
暴力を振るったのはどっちだよ。よくもまぁそんなことが言えるな。
そんな呆れと嘲笑が顔に出ていたのか、鴨志田が顔を顰める。
「お前：： 調子に乗るなよ。俺の気分ひとつで、お前を退学にすることだって出来るんだからな。」
こちらに指を指しながら、小声で言った。
実際、今回の事件から察するに、鴨志田にはそれくらいの権力があるのかもしれない。実際原作においても、主人公達は退学目前まで追い詰められていたはずだ。
いくらなんでも退学は困る。できるだけ大人しくしておいた方が

いいのかもしれない。
そんなことを考えている間に、フン、と気分を悪くした鴨志田が去っていった。
入れ違いに竜司がやって来て、
「悪ぃ、今戻った・・・ って、今の鴨志田じゃねぇか。」
鴨志田を睨みつけながら竜司が言う。先程あったことを話すと、
「そりゃいいや。鴨志田のやつ、プライドを傷つけられるとすぐ怒るからな。器の小さい野郎だぜ。」
と、竜司がニヤリと笑いながら話した。
そんな話をしながら昼休みが終わり、その後鴨志田に会うことも無く学校を終える。
その後の数ヶ月も特に何事もなく・・・ 普通に高校生活の1年間が終わった。時間が経つ事に噂されることも減り、今もやや避けられてはいるが、普通に学校生活を送れている。
現在は春休み。朝起きてすぐ、ベッドに寝転がりながらふと考える。
2年になれば主人公が転校してくる。更に言えば、転校してすぐに鴨志田のパレスに入ることになるはずだ。
パレスというのは、簡単に言えばその人間の心の歪みを具現化したような場所で、主人公達はそこで敵・・・ シャドウと戦いながら、心の中の「オタカラ」を奪うことで、ターゲットの改心を目指す。そういう話だったはずだ。
鴨志田を改心してくれるなら願ったり叶ったりだが、問題はそのシャドウとの戦いには命の危険が伴うということ。そのシャドウと戦うため、主人公達は反逆の意志の力、ペルソナで戦うことになる。
主人公と竜司がペルソナに目覚めることはほぼ間違いない。それはいい。問題は俺だ。いつも通り竜司と一緒に行動していると、まず間違いなく主人公と出会うことになり、パレスにも入る羽目になるだろう。そうすると、「反逆の意思」などとは無縁の事なかれ主義な俺にはペルソナは目覚めないし、そうなれば足手まとい、最悪死ぬ。
つまり、主人公と出会う日だけは絶対に竜司と行動するわけにはい

かない。これは幾ら竜司と仲が良くても譲れない。命に関わるからだ。

・・・しかし、1つ問題があった。主人公と出会う日にちを正確に覚えていないことだ。これではいつ主人公と出会うのかが分からない。かといって、毎日竜司を避けるのも気が引ける。

だが、これには解決策があった。確か、初めてパレスに行くことになるのは雨の日だったはずだ。4月の雨の日だけ、理由をつけて竜司と登校しなければいい。よし、これで行こう。

そう考えて、とりあえず原作の事を考えるのはやめ、竜司と遊びに行ったり、バイトをしたりしながら、春休みが過ぎ去っていった。

そうして4月になり、学校が始まり、2度目になる入学式を迎えた。とは言っても、原作に関わるような主要人物は1年生にはいなかったはずだ。

大した変化も無く、2年生の春を迎えるのだろう。そう思ったが。

運の悪いことに、2年になって竜司とは別のクラスになってしまった。まぁ確率的には普通のことだが、孤立しやすいように、鴨志田が裏で手を回しでもしたのだろう。そんなことを思う。

竜司は元陸上部とは同じクラスだったようで、ある程度は孤立せずに済んだようだが。俺の方はかなり気まずい。竜司も気を使って、休み時間には出来るだけ俺のクラスに来て話をしている。ありがたいことだ。

ついでに高巻杏と同じクラスになってしまったが、厄介者扱いの俺には特に関わって来ることも無く、これといった問題も起きていない。席は割と近くになってしまったが。

そして、高巻と同じクラスということは。主人公とも同じクラスだと言うことだ。なんて運が悪いんだ。竜司と別のクラスになったことよりも、そのことが不幸に感じる。原作に関わるのはもう避けられないのだろうか。・・・ もう関わってしまっているが。

憂鬱になりながらも1週間ほどの時間が過ぎて、今日は4月11日。窓を開けて外を見ても、雨は降っていない。今日も大丈夫そうだ。

そう思い、いつも通りの時間に家を出た。
そうしてしばらく歩いて竜司と合流し、話しながら歩いていると…
雨が降ってきた。
え？
…　もしかして、原作でも途中で雨が降ってきていたのか？まずい。前世から十数年経って、所々の記憶が抜けているようだ。雨の日に主人公と竜司が出会う。そのワンシーンだけしか思い出せていなかった。
どうするべきか。ここで突然竜司と別れるのは不自然すぎる。
そう考えていると…
車に乗った鴨志田が、高巻に話かけているのが見えた。

そこで、ハッキリと思い出した。
鴨志田は秀尽の女生徒に手を出していて、気に入ったやつにだけ露骨に気をかけていた。このシーンで竜司がその車を走って追いかけ、そして…　主人公と出会う。
ということは。鴨志田の車の近くを観察する。

いた。長めの黒髪に、黒縁メガネ。白い肌に、やや中性的で、それでいて端正な顔つき。
間違いない。
あいつがペルソナ５の主人公だ。
鴨志田の車と女生徒に竜司も気づいたようで、
「ん…　？あ！あれ高巻じゃねーか！それに車に乗ってるのは…　鴨志田！」
「おい、急ごうぜ！高巻がなんかされてるかもしんねぇ！」
「いや、俺はちょっと体調が…」
俺の言い訳を最後まで聞くことなく、俺を引っ張り駆け出した。
冷や汗が止まらない。やめてくれ。抵抗しようにも、現在も陸上部時代の名残でトレーニングを続けている竜司の力には勝てず、引きず

られていく。
　というかそもそも、原作の竜司はこの時点で鴨志田が女生徒に手を出していることに気づいてたはずでは無かったか？いや、原作ほどグレてない竜司は、原作と比較すると鴨志田への執着が薄いのかもしれない。
　そうなると、高巻やその友達が何をされているのかも知らないのだろうか？
　そんな現実逃避を兼ねた思考を続けている間にも、鴨志田の車に高巻が乗せられる。・・・　実際は、車に乗せて送ってもらうだけのはずなので、必死になって追いかける必要は無いのだが。
「待て！」
　そんな竜司の叫びが聞こえないのか、或いは聞こえないフリをしているのか。そのまま鴨志田の車に高巻が乗り込み、車が道路を走っていった。
「クソ・・・　あの変態教師が。」
　諦めた竜司が立ち止まり、呟く。
「変態教師？」
　主人公がそれを聞いて思わず呟いた。
「ん？」
　その呟きを聞いて、竜司が主人公の方を向く。ついでに俺から手を離す。離すのが遅すぎる。もっと早く離してくれ。
「なんだよ。鴨志田にチクる気か？」
「カモシダ？」
　少し苛立っている竜司がやや喧嘩腰で主人公に話しかける。鴨志田のことを知らない主人公は、思わずその名前を聞き返す。・・・　どうやって逃げるかは、とりあえず置いておくとして。話が終わらなさそうなので、話に入る。
「・・・　竜司、そいつは転校生だ。鴨志田のことも、お前のことも知らないよ。一昨日くらいにホームルームでも言われてたはずだが？」
　・・・　そういう俺も、主人公と同じクラスになったショックで転校してくる日を聞きそびれるという失態をしでかし、今日がその日だとい

うことを知らなかったわけだが・・・
「マジかそれ！　そんなこと言われてたっけ？全然覚えてねーよ。」
驚きながら竜司が言う。まぁそんな事だろうとは思った。
「まぁいいか。大した雨でもねーし、遅刻すんぞ。お前もさっさと行こうぜ。」
そう言って学校へと歩き出す竜司に、
「いや、だから俺はちょっと今日・・・」
そう言いかけた時。
鋭い頭痛がした。
「うっ！」
竜司が思わず呻いた。
チラリと横を見ると、竜司や主人公も、同じような頭痛を感じたらしい。
この頭痛は。しまった。遅かったか。
「うひーアタマいてぇ・・・」
「帰りてぇ・・・」
呑気に竜司が頭を抑えながら呟いている。
・・・この頭痛は確か、イセカイナビ・・・パレスへと向かうためのアプリが初めて起動した時に起こるものだ。ということは、もうこの場所は現実ではなく、パレスの一部へと移り変わっているのだろう。
辺りを見回すと、先程まで喋っていた学生や、通勤途中のサラリーマンがいない。やはりパレスの中で間違いないだろう。
・・・原作では、パレスからどうやって抜けていたんだったか。鴨志田の城から遠ざかれば、おそらくはパレスからも抜けられたのでは無かったか。
であれば、まだ遅くない。竜司には悪いが、ここから離れて・・・

（見捨てるのか？）

そんな声が、頭の中から聞こえた気がした。
「ッ!?」
驚いて辺りを見回す。当たり前だが、周りに竜司と主人公以外の人間はいない。
幻聴だろうか。それにしては妙にハッキリ・・・
・・・思い当たる節は、無い訳では無い。だが、有り得ない。自分にそんな覚悟など無いからだ。
極限状態で頭でもおかしくなったのだろう。そう、強引に結論付ける。
だが。
バタフライエフェクト、というものがある。小さな出来事が、様々な物事に干渉し、結果的に大きな現象を引き起こす、というものだ。
原作では、主人公がペルソナに目覚め、謎の黒猫モルガナと共に、パレスでの窮地を切り抜ける。竜司が死ぬことも無く、1度目のパレスへの侵入を終える。そのはずだ。
しかし、俺という存在は原作にはいない。パレスでの出来事に影響が無い、とは言えない。
もし。もしだ。俺という存在が現れたことで、竜司が大きな怪我を負ったら。・・・死んでしまったら。
その責任は、俺にあるのではないか。
・・・もし、そうならば。
竜司を助ける義務が、責任が。俺にはあるのではないか。
友達を見捨てるわけには行かないだろう。ましてや、俺にその責任があるのなら、なおさら。
「おーい、何ボーッとしてんだよ。早く学校に行こうぜ。」
竜司が俺に声をかける。
ある意味では、今日が主人公と会う日だと言うことに気づけて良かったのかもしれない。
俺が成すべきことに、気づけたのだから。
覚悟を決めて、2人と共に学校へと続く細道に歩き出した。

意志の化身

細道を歩きながら考える。これからどうするべきか。原作通りに行けば、このまま鴨志田のパレスに入り、捕らえられて牢屋に入れられる。そして、そこで主人公がペルソナに目覚める・・・ という展開になるはずだ。

理想は俺が何もせずともこの展開になることだが、そうなるとは限らない。とはいえ、無理に介入して原作をねじ曲げれば、今後の物語にまで影響が出てしまう恐れがある。

今回達成しなければならないことは、

1．主人公がペルソナに目覚めること。

2．主人公がモルガナと出会うこと。

3．主人公と竜司が死ぬことなく、出来れば重傷を負うことなくパレスから出ること。

大きく分けてこの3つだろう。

1つ目に関しては疑問の余地もない。主人公がペルソナを出せなければ戦えるやつがいない。

先にモルガナに出会っておく・・・ というのも選択肢としてなくはないが、うろ覚えの記憶でモルガナのいる場所にたどり着けるかということ、鴨志田の従えるシャドウのことを考えると、かなり難しいだろう。

更に言うなら、ここでペルソナに目覚めなければ後々の物語に影響が出ることは間違いないだろう。モルガナと協力することも難しくなる。

2つ目もほぼ同じ理由だ。主人公の力だけでパレスから脱出するのは難しい。そもそもここでモルガナに出会わないと、今後パレスに関わるための接点が無くなる可能性が高い。

3つ目も物語の進行に大きな支障をきたすだろう。死ぬのは勿論、重傷で今後自由に動けなくなることも出来れば避けたい。

・・・ それ以上に、間接的でも俺が原因で人が死ぬなんてごめんだ、というのもあるが・・・

とにかく、これらを達成するには、パレスに入り、鴨志田に捕まり、脱出しながらモルガナに出会う必要があるだろう。要は原作通りに進ませればいい。そう考えていると、いつの間にか鴨志田のパレスの前に着いていた。
「なッ!?」
パレスを見た竜司が、驚いて声を上げる。そして来た道を振り返り、
「道・・・ 間違えてねーよな。」
「・・・ やっぱ、合ってるよな。」
確認するように呟いた。
目の前にあるのは、見知った高校ではなく。
現代の街には明らかに浮いている、大きな城が建っていた。
「どうなってんだ・・・ ?」
「中入って、聞くしかねぇか。」
驚きながらも、ここが秀尽高校であることは間違いないと確信した竜司は、俺と主人公の方を見て言った。
俺は頷いて、竜司の後ろを歩き出した。
そうして、鴨志田のパレスへと入っていく。
パレスの中も外観と同じように、
見知った高校ではなく煌びやかな装飾が施され、シャンデリアが吊るされた、いかにも、という感じの内装になっていた。正面に、大きな鴨志田の絵が見える。
「お・・・ おっかしいな・・・ 学校が・・・」
竜司が言った。
1日でいつも通っている高校が城に変わっていたのだから、当然の反応ではある。
「ここが学校?」
主人公が竜司と俺に尋ねた。
「そのはずだぜ・・・ 門に『秀尽』って書いてあったしよ・・・」
「・・・ あぁ。それに1年以上も同じ道を通って登校しているんだ。今更間違えるとは考えにくい。」

竜司に続いて、俺も言う。我ながら白々しいと思った。
とはいっても、ここで真実を伝えるのは得策ではない。そもそも信じてもらえるかどうかが怪しいし、なぜそんなことを知っているのかを説明出来ない。これがゲームの世界だから、なんて高校生にもなって言っていたら、幾ら友達の竜司でも頭の病気を疑うだろう。
その後も竜司はここが秀尽であることを確認するように、主人公や俺と問答する。
そんなことをしていると、部屋から鎧を着て、剣と盾を持った、騎士のような出で立ちの・・・ 恐らくは、シャドウが出てきた。
顔は青い仮面を被っていて、肌が全く見えない。
「ビビらせんなよ・・・」
どうやら何かの催しだと考えた竜司は、ため息をつきながら言った。
とりあえずここまでは原作とほとんど変わりがない。
「誰だお前、生徒なのか?」
そう言いながら、竜司は動く鎧へと近づく。
「つーか、カッコすげーな・・・ 鎧、ホンモンか?」
「・・・。」
竜司の問いかけに、鎧が答えることは無い。
「黙ってねぇで何とか言えよ。お前・・・」
そこまで言いかけた時、もう1人の同じ格好をした鎧が現れ、こちらに近づく。
「・・・ お、おい、何だよ。」
とても催し物とは思えない雰囲気に思わず竜司もたじろぐ。
そんな雰囲気の中、
「ドッキリだ。」
という、状況を理解出来ていないのか、はたまたふざけているのかは分からないが、少なくともこの場で言う言葉では無いであろう台詞を、主人公が言った。

「そんな空気か、これ？」
思わず竜司もツッコミを入れる。
「・・・どう見ても『ドッキリ大成功！』なんてプラカードを持った仕掛け人が出てくるような空気ではないな。」
思わず俺もツッコミを入れる。
「・・・だよな、とにかくコイツらやべぇ。逃げるぞ！」
そう言って竜司が俺と主人公の方へ顔を向ける。
「分かった。」
そう言って主人公と竜司が入口の方へ駆け出す。
俺も少し遅れて後に続くが、同じような鎧がぞろぞろと俺たちを取り囲み、逃げさせまいとする。
「くそ、何なんだよこいつら！」
竜司が叫ぶ。危機的な状況とは裏腹に、俺は安堵していた。俺の記憶が正しければ、原作と変わりはない。この後は竜司が鎧の持つ盾で殴りつけられ、その後主人公と竜司が捕らえられ、牢屋に連れていかれる。
そして記憶の通り、鎧の内の一体の腕が動き・・・

俺の背に、勢いよく盾がぶつけられた。
「ぅッ!?」
鈍い痛みに声が漏れ、そのまま床に倒れる。
「海人!?」
竜司の叫ぶ声が聞こえる。
芯に響くような痛みを感じながら、頭を回転させる。
想定外ではあったが、ここで誰が殴られるかなんて関係はない。
むしろ、竜司が殴られなくてよかった、とさえ思っている。
そんなことを考えている最中も、竜司と主人公を鎧たちが捕らえ、運んで行く。
「連れて行け！」
鎧たちが言う。
原作通りの台詞を聞き、ひとまず安心した俺は、そのまま意識を手

放した。

「おい！起きろ、このゴミが！」

罵る声と、腹部に感じる痛みで目が覚めた。

段々と目が開いていく。目の前にいたのは、顔は鴨志田だが、ハートが1面に描かれた趣味の悪いマントに、頭には安っぽい王冠。

間違いなく、鴨志田のシャドウだ。

チラリと周りを見ると、どうやら牢屋のようだが、竜司も主人公も見当たらない。

「どうした？仲間のことでも気にしているのか？」

「安心しろ。あいつらは今頃、隣の牢屋で処刑を言い渡されている所だ。」

「不法侵入者は即刻処刑。それが、この俺様の城でのルールだ。」

シャドウ鴨志田が喋る。

・・・ そうか。なら、安心だ。

鴨志田はその場に立ち会わせていないものの、竜司の死の危機に主人公はペルソナに目覚めるに違いない。

計画の達成に思わずフッ、と笑いがこぼれる。

それを面白くないと思ったのか、鴨志田が顔を顰めて叫ぶ。

「貴様ァ・・・ 貴様のそういう所が癇に障るんだよ！」

「俺様に逆らうゴミ虫など、絶望して下を向いて生きていればいいのだ！」

「なのに貴様は・・・ いつもいつも、俺様の邪魔をする！」

「坂本を助けやがって！居場所を無くしてやろうと思っていたのに、貴様のせいであいつは今も呑気に生きてやがる！」

本気の蹴りやパンチが俺に突き刺さる。1年前と違って、ここはパレスだ。周りの目など気にする必要も無いようで、顔も身体もお構い無しに殴打する。

涙が出るほどの激痛。口の中に滲む血。青くなっていく肌。そん

な中でも、責任を果たせた安堵からか、余裕のある態度のままだ。
そんな態度を取ったままだからなのか、鴨志田の怒りは更にエスカレートして行く。どこから取り出したのか、鴨志田は剣を握っている。鎧達が手にしていた剣だ。
「しばらくいたぶってやろうと思ったが、もういい。この場で貴様の死刑を執行する！」
そう言って、痛みで動けない俺に剣を構える。
そこで、牢屋の外から竜司と主人公が見える。
「おい、海人！」
竜司が叫ぶ。その隣にいる主人公は、ゲームで何度も見た怪盗服。どうやら、無事にペルソナに目覚めたようだ。
「なに!?貴様ら、どうやってここに・・・ あの、無能共めが！」
「だが、まぁいい。貴様らはこの後、俺が直々に処刑してやる。今は指をくわえて見ていろ！」
鴨志田が、勝ち誇るように叫ぶ。
「なんだとてめぇ・・・ おい！ふざけるなよ！そうだ、お前！あいつを何とかしてくれ！」
主人公に竜司が叫ぶが、ご丁寧に牢屋には鍵がかかっている。
竜司には悪いが、これは正直助からなさそうだ。
・・・ とりあえず、出来ることはしただろう。死ぬことに恐怖もあるが、どこか達観して今の状況を見る。もしかしたら、死んだら前世の世界に戻っていました。そんなことがあるかもしれないな。
２回目なのに、短い人生だった。
馬鹿なことを考えながら、諦め、目を閉じようとしていると・・・
『それで終わりか？』

異世界に入ってすぐに頭に響いた声が、また聞こえてくる。今度はより、鮮明に。
『友のため、世界のため・・・ 何を成すこともなく、死んでいくとは大した自己犠牲だ。』

…　うるさい。
『お前はこれで満足か？この世界で、何も成せず。何を知ることもなく、ただ死んでいく。』
…　なら、どうしろって言うんだ。俺に何が出来る。やれることならもうやった。
『違うな。貴様はとうに諦めた。この世界の一部として生きることも、伸ばせば手に出来る力さえも。』
…　何を、言ってんだ。
『貴様が真に欲するのは、自由だ。己の成したい事を、思うがままに出来る自由を。』
…　お前の正体が、俺の考えと違わないなら。俺の意志が、お前の目に適うと言うのなら。
その自由を、お前が寄越せよ。
『身勝手なものだ。ならば、何者にも邪魔されぬ力をくれてやろう。』
頭に激痛が走る。
『契約だ。我は汝、汝は我。』
「ぐっ…」
思わず呻き、頭を抑える。
『仮初の舞台の上で、知ってなお救いの手を差し伸べる者よ。』
「うお…　おぉ…　あぁぁ…　！」
頭の痛みが更に強くなり、思わず叫ぶ。
『己の愚かさを正義とし、貫き通す力を授ける！』
痛みが収まり、代わりに顔に仮面が着いている。
『高らかに叫べ！我が名は！』
その仮面は両手で強引に引き剥がしながら、叫ぶ。
「来い…　俺の、ペルソナ…　！」

「ラウール!!!」

仮面を剥がしたと同時に、豪風が巻き起こる。

「うぉ・・・！」
鴨志田が呻く。
そしてもう一度こちらを見ると、
赤いハットに赤いスーツ。黒いネクタイと、巨大な機械仕掛けの黒い翼。
俺のペルソナ、ラウールと・・・赤いスーツに身を包んだ、俺が立っていた。

反逆と猫と

ペルソナを覚醒させた俺は、鴨志田のシャドウの方へ、頭に浮かんだ呪文を唱えた。
「エイハ！」
「うおっ！」
突然ペルソナが目覚めたことに驚いた鴨志田は、それをもろに食らう。体制を崩した鴨志田が、鍵を落とす。恐らくはこの牢屋の鍵だろう。
それを素早く拾い、牢屋から出た俺は、外側から鍵を掛けて鴨志田を閉じ込めようとする。
「待て、貴様！」
それを阻止しようと、こちらへと向かってくる鴨志田。
「ハッ！」
主人公が向かってくる鴨志田にナイフを振るう。
それにより鴨志田が一瞬怯む。その隙に鍵をかけ、鴨志田を閉じ込めた。
「すまん、助かった。」
「海人、お前までなんだその格好・・・！」
主人公に感謝を述べていると、竜司がこちらの格好を問いただす。
赤スーツに黒ネクタイ。赤いハットと、特徴的な黒い仮面。ベネチアンマスクに近いように見えるが、マスクが側頭部まで広がっており、端部分が磁石に着いた砂鉄のようにギザギザとした形状になっている。
片手にはステッキのような物を持っていた。まさかこれが俺の武器なのか？と思い調べていると、ステッキの持ち手に切れ目を見つける。その部分の端を持って力を入れると、ステッキの棒部分が取れて、中から刃物が出てくる。主人公の持つナイフよりやや刀身が長い。仕込み杖、というやつだろうか。
などと、自分の衣装を調べていると、突然いつもの制服姿に戻る。
「うお、戻った・・・!?」

主人公の方を見ると、やはり制服姿に戻っていた。
変化に戸惑っていると、鴨志田が檻を掴み、
「貴様らあぁぁ！」
と怒鳴る。
「マジでイミわかんねぇ・・・ なんなんだよここ！」
「とにかく逃げんぞ！先に行け！」
竜司が叫ぶ。それを聞いて、俺と主人公は走り出した。
俺がペルソナに目覚めた理由など、頭の中では考えたいことが幾つもあったが、とにかく逃げるのが最優先だ。
「貴様ら、オレ様にこんなことしてタダで済むと思っているのか！」
檻の中の鴨志田が捲したてる。
「気にするな、とにかく行くぞ！」
驚いて振り返る主人公に声をかけ、走り出す。
出口を探すため、３人で地下道を走り回る。
主要な事件や人物は覚えていても、パレスの道まではしっかりと覚えていない。
迷いながら通れそうな道を探していると、竜司が声をかけてくる。
「なぁ、何だったんだよあの格好と、あの後ろに立ってたヤツ！」
先程のペルソナのことだろう。ここで正直に答えてしまうと、何故ペルソナのことを知っているのかという疑問が生まれてしまう。
「分からない。気がついたらあの格好になっていて、後ろに立っていた。」
と、シラを切っておく。
「・・・ やっぱそうか・・・ あいつもそんな感じみてーだし、なんなんだよ一体。」
竜司が頭を抱えている。無理もないか。突然２人の人間の衣装が変わって変な力を使っていたら、現代に生きている人間なら誰でも混乱する。
とはいえ、説明することも出来ないので誤魔化して道を探す。
途中、出口のような扉を見つけるものの、その先は出口ではなく、水路のようだった。

「オイオイ・・・ 嘘だろ・・・」
「出口じゃないのかよ！いったい、なんなんだよここ!?」
思わず悪態をつく竜司。主人公もやや残念そうな面持ちだ。
「落ち込んでても仕方ない。早く出口を探そう。」
そう言って、先に進む。
「・・・ 分かってるよ！ 行くぞ！」
竜司も後に続き、主人公に声をかける。
「お・・・ おい、あれ・・・」
竜司が呟く。
少し先に進むと、
水路の上に鎖で吊るされた牢屋と、中に秀尽の制服を着た生徒がいた。
「悲鳴・・・ 聞こえたもんな・・・ やっぱ捕まってたの、俺らだけじゃねぇんだ！」
「明らかにやばそうだ・・・ けど、今は助けてらんねぇ。行くしかねぇ。」
竜司が悔しそうに言って、先へと進む。
その先は行き止まりになっていて、意味深な橋と石像が置いてあった。
「また行き止まりかよ・・・」
「引き返して別の出口探すっきゃねぇか。」
竜司が少し落胆したものの、切り替えて先に進もうとする。すると、
「・・・ おい、そこの。」
牢屋の方から声がした。
「そこのキンパツと、くせっ毛と・・・ えーと、まぁとにかくそこの3人！こっち向け！」
・・・ 俺だけ特徴が少なくて悪かったな。
その声に竜司と主人公も、牢屋の方に体を向ける。
牢屋の中には、黄色のスカーフをつけた2足歩行の黒い猫のマスコットのような生き物が動いていた。

モルガナだ。とりあえず、予定していた目標の大部分は達成出来たな。
「なんだ!? こいつ!?」
竜司が驚きの声をあげた。そりゃそうだ。
主人公もかなり驚いた様子だ。
モルガナが続ける。
「オマエら、城の兵士じゃねぇな!? こっから出してくれ！」
「ほら、そこにカギあるだろ!?」
モルガナが指し示した先には、確かにこの牢屋の物と思われる鍵が落ちている。
…いくら何でも、不用心すぎないか。
「…外出てぇのはこっちなんだよ…！」
「出してやりてー気持ちはあるけどよ、敵かも知れねーやつを出すわけにはいかねーよ！」
と、竜司が言った。
「捕まってんのに敵なわけないだろ！助けてくれよ!?」
モルガナの悲痛な叫びが聞こえる。どっちの気持ちも分からないでもないが。
そこで主人公が、
「猫？」
と疑問の声をあげた。
それに対して、
「猫じゃねぇ！次言ったら許さんぞ！」
と怒り出した。正直猫以外だったらぬいぐるみか何かにしか見えない。
そんな問答をしていると、兵士の足音が聞こえてくる。少しまずいな。
「竜司、こいつが敵かは分からないが、この城の出口について知ってるかもしれない。連れて行った方がいいんじゃないか？」
俺の提案に、
「なぁオマエら、出口が知りたいのか？なら、出してくれたら案内する

ぞ！」
「捕まって処刑は嫌だろ？」
モルガナが言う。
竜司が主人公と俺にコソコソと喋る。
（悪いやつには見えねーけど、どう見ても怪しすぎんだろ。人間でもねーし、猫くらいにしか見えねーけど猫でもねーって言ってるしよ。）
「聞こえてるぞキンパツ！猫じゃねぇって言ってんだろ！もう一度言ったら許さんって言ったよな!?」
モルガナには聞こえていたようで、かなり怒った様子だ。
「騒ぐなら出さない。」
主人公がピシャリと言った。
「さ、騒がない！もう騒がないから、出してくれよ！」
慌ててモルガナが叫んだ。・・・ 主人公、モルガナの扱い方が分かってきたようだ。
「どうするよ・・・」
未だに迷ってるようで、竜司が呟いた。
「オマエらだけで出られるってんなら、好きにしろよ！」
モルガナが言った。
兵士の足音はどんどん近づいてきている。
「マジなんだろうな!?」
竜司が焦ったようにモルガナに問いかける。
「早くしないと捕まるぞ！」
ふてぶてしくモルガナが言う。なんだか竜司だけ舐められてる気がする。
竜司は迷いながら、
「し、仕方ねぇ・・・」
そう言って鍵を拾い上げて、牢屋を開けた。
モルガナは牢屋から出ると背伸びをして、
「フゥ～、シャバの空気はうまいぜ。」
と、気持ちよさそうに深呼吸する。
のんびりとした空気に、

「出口はどこなんだよ、化け猫！」
と、竜司が急かすように叫ぶ。
「猫って言うなっつってんだろ！ワガハイにはモルガナっていう名前があるんだ！」
「んなこと今はどうでもいいんだよ！早くしろ！」
モルガナの名乗りも聞いてはいられないようで、竜司が更に急かす。
「わ、分かってるよ…」
「ついてこい、静かにだぞっ！」
そう言ってモルガナが走って行く。俺たちもその後を追う。

一方、学校では。
「… もう4限じゃない。」
主人公と司馬の担任である、川上　貞代が職員室で溜息をつく。
「… 前科持ちなんて言われてる雨宮君はともかく、今まで無遅刻無欠席の司馬君まで学校に来ないなんて…」
「佐倉さんも、司馬くんのお母さんも家は出たって言ってるし、警察に連絡を…」
「いや、そんなの余計面倒なことに…」
「… ハァ。面倒なこと押し付けられたとは思っていたけど、予想以上だったわ…」
そう呟いて、作業に戻った。

しばらく走っていたモルガナは、上がった橋と石像のある所で止まった。その石像は鴨志田の顔のようで、無駄に精巧に作られているせいか、凄く不気味に感じる。
「なにやってんだ？」
竜司がモルガナに問いかける。

「キンパツ。何やってるか分からないのか?ま、お前じゃ分からないだろうな。」
先ほどの猫発言を根に持っているのか、モルガナが挑発するように言う。
「んだと!勿体ぶってねーで早く教えろよ、化け猫!」
「猫って言うなって何回言わせんだ!オマエだけは絶対に許さんぞ!」
と、モルガナが叫ぶ。
こいつら、今兵士に追われてることを完全に忘れてるな。
主人公もやや呆れたような表情だ。
・・・ 原作だと、何をしてたんだったか。確か、この石像に何かして・・・ 鴨志田像に色々と試してみる。
「こっちには時間がねーんだよ!それともまた閉じ込められてーかこいつ!」
「閉じ込められるもんなら閉じ込めて見やがれ!ワガハイにはな、お前には無い能力が・・・」
・・・ まだ言い争っているようだ。
試行錯誤していると、鴨志田像のアゴが動くことに気づいた。アゴを下げてみる。すると、目が光り、橋が下がっていき、向かい側に通れるようになった。
「・・・ あ。」
モルガナと竜司が同時に言う。
「お手柄だな。」
主人公が手を叩きながら言う。
「・・・ こいつ、やっぱ牢屋に閉じ込めといた方がいいんじゃねーか?」
「おい!」
竜司の呟きに、モルガナが反応した。・・・ どうでもいいが、もう少し仲良くしてくれ。

現実への帰還

未だにぎゃーぎゃーと言い争いを続ける竜司とモルガナを尻目に、先へと進んで行く。

橋を抜けてしばらく走っていると、ドアから兵士が出てきて鉢合わせてしまった。

「う、うわぁ!! やべぇ、きたぁー!!」

思わず竜司が腰を抜かす。

俺と主人公は、咄嗟にペルソナを出して構える。

「ちっ、飛んだ素人め! じっとしてろ!」

竜司に向かってモルガナが叫んだ。

「おい、オマエら!戦えるんだろ?やるぞ!!

・・・ 来い・・・ ゾロッ!!」

こちらに向かって叫び、モルガナが自分のペルソナ、ゾロを出す。

これが生で見るペルソナか。自分以外のペルソナを見た事がなかったため、少し感動してしまった。

「お前もそれ、出んのかよっ!?」

驚いた様子で竜司が言った。

それを気にせず、

「速やかに黙らせてやる!」

モルガナが手を組んで、戦闘態勢に入る。

シャドウも兵士の姿から変わり、ピンクの悪魔のような見た目の生き物と、カボチャのお化けのような物に変わる。

「シャドウめ・・・ 迎撃態勢に入りやがったな!

ワガハイたちを殺すために、本気を出してきたってことだぜ!」

「支援してやるから死ぬ気で戦え!行くぞ!」

モルガナの言葉に、主人公と俺は覚悟を決めて構える。

まず、主人公がピンクの悪魔に向かって、

「エイハッ!」

っと叫んだ。赤黒く禍々しい弾のような物が敵に向かって飛んでいく。

動きはそれ程速くはないようで、その攻撃をマトモに受けたようだ。苦しそうに呻いていて、ダメージはあるようだが倒れはしなかった。
俺も続いてダメージのある悪魔に向かってステッキに仕込まれた剣で切りかかる。
「そらッ！」
先程の攻撃で弱っていたようで、ピンクの悪魔はそのまま断末魔を上げながら倒れた。
あまりいい気分ではないものの、この状況では仕方ない。切り替えてもう一方の敵に体を向けた。
「ふん、オマエらやっぱり素人だな。」
モルガナが言った。まぁ、その通りなんだが。
「戦いってのはこうやるんだよ！　意を示せゾロ！」
そうモルガナが叫ぶと、突然敵の居るところにだけ強風が吹き、その風が敵を襲う。
恐らく、モルガナはガルを唱えたのだろう。弱点だったようで、敵が態勢を崩した。
なるほど、その辺りはゲームと共通なのか。
「弱点に攻撃して敵をコカす！その隙をついて更に動く！　基本中の基本だ！　覚えとけ！」
モルガナがそう言って、続けざまに敵に切りかかった。弱点を突かれて弱っていた敵は、そのまま倒れた。
「オマエら、やるじゃねぇか。ペルソナの力も、中々のもんだ。」
モルガナがこちらを褒めた。
「ペルソナ・・・？　お前らがブワーって出す、あれか？」
「呼び出す時、くせっ毛の方が、仮面を剥がすのを見たろ？　人は誰でも、仮面を被ってる。それを自覚し、自ら剥がすことで・・・」
と、そこまで説明した所で、俺と主人公の衣装が元に戻る。
「・・・　また戻っちまった・・・」
竜司が呟いた。
「力の扱いが、まだ完全じゃないようだな・・・　こんだけ騒がれてて、変

身が解けるはずがない。」
「あの姿は本来・・・」
と、そこまで説明した所で、
「あー、もういい！　さっきからワケわかんねぇし！」
頭を掻きながら、説明を遮って竜司が言った。
「話くらい、じっと聞けねぇのかキンパツ！」
遮られたことが不服だったのか、不満げにモルガナが言った。
また言い争いが始まりそうだったので、
「とりあえず、説明してる時間はないんじゃないか？　早い所、出口に行こう。」
と、俺が話に入った。
「・・・そうだな、出口までそう遠くない。急ぐぞ。」
モルガナもここで話していてもしょうがないと思ったのか、話を終えて走り出す。
しばらく着いていくと、牢屋の中に秀尽のジャージを着た生徒が這いつくばっていた。確か、バレー部の生徒だったと思う。パレスは鴨志田の認知上の世界だったはずで、バレー部の生徒を奴隷のように扱っている。だから、牢屋に入れられているという話だったはずだ。
「ちょっと待った！」
それを見た竜司が突然立ち止まる。
「これ、こいつの格好・・・どっかで見た気が・・・」
竜司が考え込みながら呟いた。
「バレー部じゃないか？秀尽の。」
俺は、悩む竜司にそう言った。
「おぉ！そうだ！　パニクってて思い出せなかった！」
竜司が大声で言った。よほど気になっていたようだ。
「今は他人の心配してる場合じゃないだろ、行くぞ！」
モルガナが叫ぶように言う。
そうこうしている間に、前方からシャドウがやって来た。
「言わんこっちゃねぇ・・・！」
溜息がちにモルガナが言う。

「迎え撃とう。」
主人公の言葉に俺とモルガナも構える。
幸い敵はあまり強くなかったため、特に苦戦することも無く、素早く戦闘を終わらせることが出来た。
「よし、新手が来る前に行くぞ！」
モルガナが急かすように言った。
その後も竜司は牢屋の中の人間を気にしていたが、
「ついてこないなら、好きにしな！」
というモルガナの言葉に、渋々と言った様子で牢屋を後にした。
そのまま正面ホールへと抜け、モルガナの後を追う。小部屋に入ると、中には通気口がある。蓋を取ればそこから抜けられそうだ。
蓋を竜司が強引に外し、脱出の準備が整う。
「やっとだぜマジ・・・！」
疲れた様子で竜司が呟いた。
「喜ぶのは出てからにしておけ。」
モルガナが注意するように言う。
話によると、原作通りモルガナはこの後もしばらくパレスに残るようだ。
主人公がモルガナにお礼を言って、俺たちは通気口へと入って行った。

「あいつら、使えそうだな・・・ワガハイの見立てが確かなら、あのクセっ毛と、フツーのやつは特に・・・な。」

そうしてパレスから出ると、いつも通りの道の中に出た。いつも通り多くの人が歩いていて、パレスのような静けさはない。
「俺ら、どうなった？」
竜司が呼吸を荒くしながら言う。
すると、主人公のスマホから無機質な機械音声が流れた。
「現実世界に帰還しました。お疲れ様でした。」
「あ？帰還しました・・・？・・・逃げきれたってことか？」

思わず聞き返す竜司。
その後はパレスで会った猫の話、城の話、城の中の鴨志田の話など様々な事を話し合うものの、結論が出ることはなかった。
苛立つように叫んだ竜司の声に警官にサボりを疑われたり、竜司がパレスでの事を話して薬物を疑われたりしながらも、その場をやり過ごし学校へと向かう。
「あの警官、まるで俺たちの話信用してなかったな…。」
まだ不満があるようで竜司がぼやく。
「まぁ、城だと喋る猫だのの話、俺も経験してなかったら頭を疑うな。」
竜司に言った。
「そりゃそうだろうけどよ… 結局、あれなんだったんだよ。」
そんなことを話していると、学校へと着いた。
当然、いつも通りの学校が目の前にはあった。
時間は既に昼休み頃になっていた。
警官から報告があったようで、指導教員が待ち構えていた。
パレスのことを話すも、反応は警官と似たり寄ったりだ。更に苛立ちがエスカレートする龍司の前に、校内から鴨志田が現れた。
「呑気だな、坂本。陸上の朝練やってた頃とは大違いだ。」
煽るように鴨志田が言う。
「… ちっ。てめぇが潰した癖によ…」
小声で竜司が言った。
確かにな。表情一つ変えずにこんなことを言えるのは、鴨志田の面の皮が厚いというかなんというか。
そんなことを考えていると、
「… 司馬。お前もか。」
鴨志田が睨みつけるように言う。明らかに俺の方が竜司に比べて語気が強くなっている。顰める顔も取り繕えていないようだ。
「とにかくだ。お前らは前の事件の事もある。事情を聞くからな、来い！」
指導教員がこちらに向けて言った。竜司がそれに意義を申し立てそうな様子だったので、

「どうせあそこの事を言っても信じては貰えないだろ。とりあえず従っておこう。」
と、小さな声で言った。それで納得してくれたのか、竜司は溜息をつくだけで他に何もすることは無かった。
指導教員について行く前に、主人公に向けて、
「じゃ、後のことは教室で話そう。名前は・・・」
「雨宮蓮だ。」
「そうか。俺は司馬海人。また後で。」
そんな会話をして、竜司と俺は校内へと入って行った。

教員の指導を受けながら、1人考える。
俺にペルソナが宿った理由。そのペルソナがラウールである理由。
・・・ はっきり言って、全く分からない。
ラウールは自分を貫く力を授ける。そう言っていた。自分を貫くとは、なんだろうか。基本的に厄介事を嫌う俺の考えからすると、降りかかる火の粉を払うための力・・・ と、言う訳では流石に無いだろう。
と、なると・・・ 竜司の時のように、原作をねじ曲げてでも救える人を救う。そういう事だろうか。
・・・ ペルソナ5では、救われなかった人間、或いは救いきれなかった人間は少なくない。それは被害者も、加害者もだ。
原作の知識と、俺の今の能力でそう言った人間を救う。それがラウールの言う自分を貫くということなのだろうか？
・・・ そんなことが可能なのだろうか。第一、竜司の時とは事情が違う。あいつは俺の数少ない友達だ。友達だから、救おうとした。見逃せなかった。そういう気持ちは大きい。
だが、見ず知らずの赤の他人は？悪行を尽くしてきた相手なら？俺は、それでも手を差し伸べられるのか？
手を差し伸べて、どうすればいい。それが善人なら良い。救っても悪行を繰り返す悪人を救って、何になるのだろう。
・・・ 俺はどうすればいいのだろう。救える力の無かった、ペルソナ

が目覚めていない時の俺なら、こんなにも迷わずに済んだ。俺には何も出来ないから。何かをする力がないから。原作を変えてしまってはまずいから。そう言って幾らでも言い訳ができた。事に関わろうとしない、自分自身を許せただろう。

でも、今の俺は違う。目の前の人を救える力を持ってしまった。助けられるのに、手を差し伸べられるのに、それに関わろうとしないなんて。

まるで、俺が悪人みたいじゃないか。

・・・ 先の事を考えても、仕方が無い。まず、助けられそうな善人を助ける。原作はもう変えてしまっている、なら、やれることをやるしかないだろう。

と、なるとまずは・・・

そこまで考えていると、指導教員に頭を叩かれた。全く聞いていないことがバレていたようだ。

そのおかげで指導が長引いてしまった。・・・ とりあえず、自分のことから何とかしないとな。

これからのこと

やっと指導が終わり、次は自分のクラスの教室へと向かう。
もう既に授業が始まっているのか、廊下には誰もいない。やや急ぎ足で教室へと向かい、ドアを開けた。
クラスメイト達はこちらを見てひそひそと話をしている。
・・・この数ヶ月で、この空気にも慣れてしまった。知らん顔でそのまま自分の席に着く。
俺の席は雨宮から見て右隣だ。先に席に着いていた雨宮に軽く会釈して、前で話をしている川上先生の方を向く。
一つ溜息をついて、川上先生が話を続け始めた。小言の一つでも言われるかな、と思っていたが、流石は面倒事を嫌う川上先生と言うべきか、ここで注意して話が長引くのを嫌ったのだろう。
「・・・じゃ、授業を続けます。ここは・・・」
俺も鞄から教科書やノートを取り出して、授業に耳を傾けようとしていたが、ひそひそと話す声が耳に入る。
内容としては、俺の遅刻やら、高巻と雨宮の関係やら、雨宮の前科の話やら、そんな所だ。この頃の高巻は確か、鴨志田と関係を持っている、という噂が立っていたはずだ。
クォーターでやや日本人離れしている容姿と、その噂が原因で学校でもやや浮いてしまっている、そんな感じだったと記憶している。
そんなことを考えている間に授業が終わり、それぞれが帰り支度を始めた。これが今日最後の授業だったようだ。
雨宮の方を見ると、この後どうするか迷っている様子だ。特に何もしなくてもこの後竜司と合流すると思うが、一応声をかけておく。
「誰かと帰る約束とか無いなら、一緒に行かないか？竜司も今日のことを話したいだろうし。」
そう言うと雨宮はそれを承諾して、帰り支度を済ませて教室を出る。
すると、雨宮が突然頭を抑える。声をかけようとすると、
「ん？どうしたの？」

と、丁度教室を出た川上先生が先に声をかけた。
「ここは城・・・ か？」
雨宮が確認するように呟いた。恐らく、城の景色と学校の景色が混ざってしまったのだろう。
川上先生は呆れたように言った。
「ハァ・・・ ちょっと君・・・ 大丈夫？ あと、もう噂になってるみたいだけど、言ったの私じゃないから。・・・ ホント勘弁してほしいわ。なんで私がこんな目に・・・ ただでさえ問題児が1人いるって言うのに・・・」
最後の方は小声で言った。川上先生には同情するが、俺が何か問題を起こしたことは無かったと思う。・・・ まぁ、問題児がクラスに居る、というだけで心労が酷いのかもしれないが。
「寄り道しないで真っ直ぐ帰りなさい。佐倉さん怒ってたわよ。・・・ あぁあと坂本君。出来るだけあの子とは関わら・・・」
そこまで言いかけると、竜司がやってきた。
「噂をすれば・・・ 何の用？今日補導されたんだって？」
ハァ、と川上先生が溜息がちに言う。
「すんませんっす。」
特に噛み付いたりせずに、竜司は素直に謝った。
その後は竜司が屋上で待っていると言い残して去って行き、雨宮の転入への不満を口にする鴨志田を見かけたりしながら、雨宮と屋上へ向かった。
屋上の扉には立入禁止と書いてあるが、構わずドアを開けて屋上に出る。
「お、来たか。悪かったな、転校生。呼び出して。」
こちらに気づいた竜司が、もう使われていないであろうパイプ椅子に腰かけながら言った。
「川上先生にも言われたんだろ？俺やこいつと関わるなって。」
「俺のことは言われなかったけどな。」
竜司の言葉に俺が思わず呟く。
「・・・ え、なんで？」

「さぁ。日頃の行いじゃないか？」
竜司の疑問に答える。これでも授業やら行事には真面目に参加してるからな。
「それ、どういう意味だよ・・・　まぁ、いいか。俺らもお前らも、学校じゃ問題児扱いだろ。　前歴があるとかなんとかで、噂になってるぜ。どうりで肝が太てぇわけだぜ。」
雨宮に向けて言う。
話が長くなることを察したのか、主人公が無造作に置いてある机に腰かけた。
「・・・　あれ、何だったんだ？城で殺されそうになったやつ・・・　夢・・・じゃねぇよな？お前も、海人もそうだよな？」
「そうだ。」
「俺もそうだな。」
竜司の疑問に雨宮、俺の順に答える。
「そうだよな・・・　３人とも同じ夢見るなんて、有り得ねぇよな。　つか、夢とはいえ、鴨志田から助けてくれたよな？　とりあえず礼を言っておくぜ、蓮。」
「別にいい。」
竜司の礼に、何でもないように答える雨宮。俺は見ていなかったが、どうやら原作通りの流れでペルソナに目覚められていたようだ。
「けど、あそこであった鴨志田・・・　ちょっと引っかかってな。少し調べて見たらよ・・・」
「鴨志田の悪い噂の話か。」
「あぁ。」
竜司の話に割り込んで俺が答えた。やはりそうだったか。
鴨志田には現時点で２つの噂がある。女子生徒と関係を持っているということ、そしてバレー部への行き過ぎた体罰の噂。後者の噂は恐らく鴨志田自身が手を回しているのだろう、あまり耳には入ってこない。
「バレー部の顧問だが、元メダリストで、部も全国行ってっから、誰も何も言えねぇ・・・　あの城の『鴨志田が王様』とか、そこが妙にリアルっ

つうか…　あの城…　また、行けんのかな…？」
竜司が雨宮に鴨志田について話し、城での事について考え始める。
が、しばらくして、考えがまとまらなかったようで、
「あ～夢だ夢！夢に決まってら！…　付き合わして悪かったな、話は終わりだ。」
と、強引に話を終わらせた。
その後、竜司が自己紹介をして、雨宮とはそこで別れ、下校した。
帰り道を歩きながら、竜司と話す。
「…　なぁ、あの場では夢っつって切り上げちまったけどさ。お前も夢だと思うか？」
竜司がふと、尋ねてきた。
「…　分からん。気になるなら、もう1回あの城に行ってみるしかないんじゃないか？」
と、それとなく俺は提案した。
「…　やっぱそうなるか。明日あいつにも声かけて、行き方探してみるしかねーかもな。…　そうなると、海人、この後時間あるか？」
竜司がこちらに聞いてくる。
「あるにはあるが…　何か用でもあるのか？」
「俺、お前らみたいにあの変な力はねーからさ。せめて威嚇出来るような物でも持っておきてーと思ってよ。…　そういうのが売ってる店に行きてーんだ。」
俺の質問に、竜司がそう答えた。だが確か、この時点で竜司はハンドガンのモデルガンを持っているんじゃなかったか？
「別にいいけど、竜司はもうモデルガンとか持ってなかったか？新しく買う必要あるのか？」
「そうだけど、あの城だと俺以外は皆戦えんだろ？しょぼい武器じゃ、相手もビビんねーと思うからよ。　それに、海人も持っておいた方がいいんじゃねーかなと思うし。」
確かに考えてみると、俺と雨宮は銃を持ってなかったな。竜司は…　ペルソナが覚醒した時に何故か持ってるからいいが。そう考えてみると、俺用の銃があった方が戦闘でも楽だろう。

「そういうことなら、早く行こう。」
「おう！」
　そんな訳で、俺は竜司に着いていき、渋谷セントラル街の路地裏にあるミリタリーショップの前へと来た。
「これがその店だ。海人は初めてだったよな、結構本格的だろ？」
「こういう店に来たことは無いな。ミリタリー系の趣味に詳しい訳でもないし。」
　その店はなんというか、アングラな雰囲気というか、立地もあって人が寄り付かなさそうな暗い外装の店だった。・・・こういう店って、店を運営するだけの利益を出せているんだろうか。
「やっぱ、海人も詳しくねーよな。俺もわかんねーから、とりあえず中入ってオススメとか聞いてみるか。」
　そう言って竜司が中に入って行く。続いて俺も入る。
　店の中にはモデルガンがショーケースや壁に所狭しと並べられてあり、店の奥にはその銃の入っていたであろう箱が散乱している。正直あまり綺麗とは言えない。
　まぁ銃が買えれば構わないので、その辺りは気にしない。しばらくは竜司とそれぞれ自分で銃を見ていたが、
「うーん・・・どれがいいのか、よく分かんねーな。本物っぽくて、敵が見たらビビるようなやつがいいと思うんだが・・・やっぱ、店員に話聞いてみるしかねーか。」
　そう言って、竜司が店員に声をかけた。すると、
「買うもん決まったのか？」
　と無愛想な様子でこちらに尋ねた。竜司がオススメの銃を聞くと、
「オススメだ？・・・てめぇで気に入ったモン持ってきゃいいだろうが。」
　と、ぶっきらぼうに言った。
「不親切じゃね？」
　竜司が思わず言う。
　その言葉に反応したのか、店主が一応色々と聞いてはくれるが、その質問もマニア向けで、竜司はあまり良く分かっていない様子だ。俺

も銃には詳しくないので、よく分かっていない。店主からのビギナー扱いも相まって、竜司はやや苛立ってきたようだ。
　そうこうしていると、店主がこちらに話を振ってきた。
「お前は？なんか欲しいモンでもあんの？」
　それを聞いて考え込む。ここで良い銃を買えれば、今後のパレス探索はグンと楽になると思う。ゲームだとどの銃が良かったんだったか・・・
「・・・じゃあ、R．I．ピストルっていうのが欲しいんですけど。」
　そう言うと、店主の目の色が変わる。
「・・・へぇ。他には？」
「えっと・・・ノックボレーカノンに、ナイフとかが売ってるなら、ミゼリコルデ。鈍器とかも売ってるなら、グランドプレッサーなんかが欲しいんですけど。」
　とりあえず、覚えていた名前を挙げてみる。
「相当詳しいみたいだな。だが、その辺のやつは今品切れだ。第一高すぎて学生には払えねぇだろ。」
　心なしか嬉しそうに店主が言う。一応バイト代を出せば買えなくはないが・・・まぁ、そもそも品切れじゃ考えても仕方ないか。少し落胆していると、
「そう残念そうにするな。・・・ビギナー向けのやつならある。そいつを見ていくか？」
　店主が言った。俺はビギナーどころかモデルガンを買った事すらないんだが。とりあえず頷いておくと、店主が銃を取りに奥に入っていった。
　すると、竜司が驚いたようにこちらに声をかける。
「海人お前、めちゃくちゃ詳しいじゃねーか！こういう店に来たことねぇって嘘だろ!?」
「いや、たまたま名前を知ってただけで・・・」
　そんな言い訳をしていると、
「たまたま知ってるってんで出るような名前じゃねぇよ。マニアでもそう知ってるもんじゃねぇ。」

店主が話に入ってきた。
「いや、だから・・・」
「わざわざ隠す必要もねぇだろ。」
そう遮られてしまった。お前、マニアだったのか・・・ という竜司の呟きが聞こえてくる。酷い誤解だ。
とりあえず、店主の見せてくれた物を見る。名前を確認するが、ゲームの知識から考えると全体的に竜司の家にある銃と性能にそこまで変わりはないようだ。
竜司にそう伝えると、とりあえず買わなくていいと判断したようで、俺の銃を選ぶことになった。
正直な所、性能に大差がないならどれでもいい。そう思ったが、並べられた銃の中に1つゲームで見た事のない物があった。それをまじまじと見つめていると、
「そいつはマシンピストルだな。それにするのか?」
と、店主が聞いてくる。・・・ まぁ、ここに並べられているなら大して性能は変わらないのだろう。それに決めて、店主に金を払い、店を出る。
・・・ とりあえず、武器を揃えることが出来て良かった。
「それにしても、海人にそんな趣味があるなんてな。意外だったぜ。」
「だから誤解だって。たまたま名前知ってただけだよ。」
帰り道を歩きながら、竜司の言葉を食い気味に訂正する。ホントか?と竜司が聞いてくるものの、それ以上詮索する気はないようで、
「ま、とりあえず今日はこれで解散にしようぜ。またな!」
そう言って、それぞれ家に帰ることにした。
家に戻ったあとは親に学校での事を聞かれると思ったが、あまり深く聞く気もないようだ。何らかの事情があったことを察してくれているのだろう。ありがたい。
自室のベッドへと向かい、寄りかかりながら今後のことを考える。今日は月曜日だ。原作で事件らしい事件が起きるのは、確か金曜日。その日に、高巻杏の友達である鈴井という女子生徒が屋上から飛び下りる。その理由はやはりと言うべきか、鴨志田だ。鴨志田に関係を迫

られた鈴井はそれを拒否しようとするが、バレー部のスタメンから外すことを盾に脅される。それに耐えきれなくなった鈴井が屋上から飛び降りてしまう・・・ そういう話だったはずだ。

・・・ この事件のあとに、鴨志田は怪盗団によって改心させられ、丸く収まるものの・・・ それでいい、とは思えない。俺はこの後起きることを知っている。そして、それを止められるだけの力も今日手に入れた。それなのに見なかった振りをするのは・・・ どうしても出来そうにない。

鈴井は、原作の中では前歴持ちの主人公にも分け隔てなく接することの出来る善人だ。そんなやつを、知らん振りして見殺しにするなんて・・・ 俺が鴨志田と同じ、悪人のように思えて仕方がない。

以前の俺なら、それでも言い訳が出来た。俺には何も出来ない、主人公達がやってくれると。だが、俺自身が助けられるだけの力を手にしてしまった。なら、もはや言い訳など出来るはずもないだろう。俺が見殺しにした。その事実だけが俺の心に残る。

それだけは嫌だ。考えるだけで手が震えてくる・・・ 落ち着け。見捨てるわけじゃない。だからこうやって考えているんだ。

深呼吸して、考える。金曜日まで、あと3日間ある。金曜日のその日に鈴井の自殺未遂を止めただけでは根本的には解決しない。原作にはその後のことが存在していない。理想は、その前に鴨志田を改心させることだが・・・ ハッキリ言って時間がまるで足りない。パレスの下見に最低でも1日、侵入して鴨志田のオタカラを盗むのに1日かかる。そもそも主人公達は改心の事などまるで知らないし、金曜日までに終わらせるのは現実的とは言えないだろう。

となれば、鈴井に自殺を踏みとどまってもらうしかないが・・・ 俺に説得できる気がしない。そもそも赤の他人に説得されて踏みとどまるようならそこまで思い詰めたりはしないだろう。

であればやはり仲の良い友人に説得してもらうしかないが・・・ 俺は高巻と喋ったことは無い。竜司は中学の同級生だったはずだから、そこから話をすることが出来れば・・・ いや、だがそれで鈴井と話しても確実では・・・

計画がまとまらない。どう考えても鈴井を確実に助けられる方法が思いつかない。スマホの時計を見るともう１２時を過ぎていた。どうする、どうすればいい。

…　焦っても仕方がない。まずは明日、高巻と話をする。出来ればその後鈴井と話して…　そこから、なんとかするしかないか。

明日のためにも、今日はこれで寝よう。焦る気持ちを何とか抑え、自室の照明を消して目を閉じた。

迫るタイムリミット

次の日の朝。目を覚ました俺はベッドに寝転がりながら今日やることを考える。・・・ 昨日は焦りすぎて、色々と見落としてしまっていた。

鈴井志帆・・・ 鈴井の自殺の直接的な原因は、作中では明言されていない。しかし、パレス内の状況や、現実での鈴井の変化を見る限り・・・鴨志田と何かがあった、ということは間違いない。口にするのもはばかられるような何かが。

少なくともそれは自殺の前日、もしくは更に前日・・・ つまり、明日か明後日には起きてしまっている。

ようは、自殺する日までが本当のタイムリミットではない。どんなに遅くとも明後日までには鈴井を説得するか、鴨志田を止める必要がある。

だが鴨志田を止めるのは不可能に近い。と、なると鈴井を止めるしかないが・・・

必死で練習してレギュラーにまでなった人間に、赤の他人から練習に行くな、なんて言われても応じるはずもない。これから起きることを話しても、それは鈴井にとって俺の妄想でしかないだろう。どうにかして、鈴井にこれから起きてしまうことを伝えられれば・・・ と思うのだが。

そう頭を悩ませている中でも、時間は過ぎて行き、登校する時間になってしまった。

途中で竜司と合流したものの、そのことが頭から離れず会話が続かない。

「おいどうしたんだよ。今日はあの城みてーなとこにまた行く予定なんだぜ?そんなんで大丈夫かよ?」

竜司が心配するように聞いてくる。そうだ、今日もパレスに行く予定だった。しかし時間に余裕が無い今、俺はパレスに行く余裕はない。竜司には申し訳ないが、ここは断って・・・。

・・・ まてよ?パレス・・・ そうか、その手があったか。いやしかし、

それだと鈴井に危険が・・・ だが、これ以外に方法は・・・
「・・・？ 何考え込んでんだ？」
竜司が不思議そうに尋ねてくる。そこで、竜司に今考えている内容について話した。
「はぁぁぁぁ!? 鈴井をあの城に連れて行く!?」
竜司はかなり驚いたようで、思わず大声で叫んでいた。
「ちょっと待てよ、鈴井って高巻のダチのやつだろ？どうしてそんな話になんだよ。」
聞かずには居られない、という様子でこちらに詰め寄る。
「・・・ バレー部が鴨志田から体罰を受けている、って噂は知ってるよな？」
「あ・・・？ あぁ、昨日聞いたから知ってるけどよ。ってまさか、鈴井も体罰を受けてんのか!?」
俺の問いかけに竜司鬼気迫る様子でが答える。
「今体罰を受けてるのかどうかは分からない。だが問題は体罰よりも・・・ 言いたくないが、更に酷いことを鴨志田にされるかもしれない。」
話の後半を濁すように俺は言った。
「更に酷いこと・・・ って、なんだよ？」
訝しげに竜司が俺に質問した。
「・・・。」
正直、口に出すのも嫌だ。思わず沈黙した俺を見て竜司は察したようで、
「・・・ まさか。鴨志田のヤロウ・・・ !」
竜司が歯を食いしばり、激しい怒りを顔に出す。
「さっきはかもしれない、といったが。俺はほぼ間違いなく実行されると確信している。それも近日中にだ。だからどうにかして止める必要がある。」
俺は話を続けた。本来鴨志田のすることを確信している事、その時期を理解していることは不自然だ。しかし、そんなことを気にしてい

られる余裕が今は無い。
「・・・ だったらよ。バレー部の体罰の件も含めて、警察にでもなんでも突き出せばいいんじゃねぇのか？」
竜司が怒りを抑えながら、俺に言った。
「・・・ 鴨志田の学校側からの信頼は相当なものだ。間違いなく揉み消されるだろう。そもそもバレー部のやつがまともに証言してくれるとは思えない。」
竜司に向けて言った。原作でも実際に体罰を受けたバレー部は鴨志田を恐れて証言をしようとはしなかった。正攻法で解決するのは不可能だ。
俺は続けて、
「だから、鴨志田がどんな人間なのか、それを鈴井に認知してもらってバレー部に行くのを一時的に辞めてもらうのが1番だと思ったんだ。」
そう言った。
「要はあの城の鴨志田や捕まってるバレー部のヤツらを見せて、鴨志田が汚ねー人間だってことを分からせるってことか。」
竜司は少し考えてからそう言った。
俺はその言葉に頷く。そこまで話した所で、学校まで着いてしまった。
「・・・ 正直、言いてーことは山ほどあるけどよ。 お前がなんかを言い出して、自分からやろうとするなんて見たことねーし。」
こちらを見て、竜司が言う。
「けど、お前はそれしかねーと思ったんだろ？ならそれでやるっきゃねーだろ。」
俺の背中を強めに叩いて、続ける。
「そんな心配そうな顔すんなって！俺も協力するからよ！ そうと決まれば、昼休みに屋上な。あいつも呼んどけよ！」
そう言って竜司は校舎の中に入って行った。心の中で竜司に感謝しつつ、俺も教室へ向かう。雨宮は席に既に着いていて、スマホの画面を見ていた。

軽く挨拶をして、昼休みに屋上に来て欲しい旨を伝えた。
雨宮はその場で了承し、それを聞いて俺も自分の席に戻る。
その後は特に何事も無く、昼休みまでの時間が過ぎて行った。
そして昼休み、約束通り主人公と屋上へ向かう。
「おう、来たみたいだな。」
竜司がこちらを見て言った。既に屋上に着いていたようだ。
「海人はもうこいつに話はしたのか？」
「いや、屋上に行ってから話そうと思ってな。」
竜司の疑問に言葉を返す。雨宮の方へと向き直り、
「雨宮、実はだな・・・」
そう言って、今朝の話をし始めた。

「危険すぎる。」
一連の話を聞いて、雨宮が最初に言った感想がそれだった。
「今朝のこと考えてたけどよ、俺もそう思うぜ。お前らみたいに変な力が使えるわけでもねーし、城のヤツらは俺らのことを殺そうとしてた。そんなとこに連れてっていいのかよ？」
竜司も賛同するように言う。竜司が続ける。
「それに。鈴井はどうやって誘うんだよ。女バレは今日も練習だろ？練習サボって不良の俺らに着いて来てくださいって、無理ありすぎんだろ。」
そう言ってこちらを見る。
「・・・昨日の敵を見るに、雨宮や猫の力でもそれなりに戦えるように見えた。俺1人でも鈴井を守れるくらいの力はあると思う。・・・鈴井を誘う方法は・・・正直、考えてなかった。」
「って、考えてねーのかよ！」
俺の発言に思わず竜司が突っ込む。
「そもそも、城にはどうやって行くんだ？」
雨宮が聞く。
「それは考えてある。昨日、雨宮のスマホから機械的な声がしてただろ？ナビみたいな。スマホにそれっぽいの無いか？」

そう聞かれた雨宮がスマホを操作し始める。しばらくして、こちらに画面を見せてくる。
「多分これだ。」
そう言って見せられた画面には、昨日の操作履歴が残っていて、
そう言って見せてきた画面には、何かの操作履歴や、何らかのナビらしい情報が羅列されていた。
「おぉ・・・ なんだこれ。これ使えばまたあの城に行けんのか？」
「多分。」
竜司の問いに、雨宮が短く答えた。
「・・・ ってなると、やっぱ問題は鈴井をどう誘うかだよなぁ。俺らが誘っても、都合良く付き合ってくれるとは思えねーし。」
竜司がうんうんと唸り出す。やはりそこが問題だ。そもそも鈴井を誘えないことには始まらない。とはいえ、上手く誘える理由も思いつかない。
「案外、普通に頼めば来てくれるかもしれない。」
しばらく竜司と悩んでいると、雨宮がポツリとそんなことを言った。
竜司が思わず言う。
「・・・ いや、お前なぁ。普通のやつならともかく、俺らに誘われて素直について来てくれる女子なんている訳ねーだろ。」

「うん、いいよ。」
場面は移り変わり、校舎内の廊下。結局いい案が思いつかず、放課後になってしまった俺達は、とりあえず竜司が高巻に話を通し、鈴井に用があるということで鈴井のもとへ案内してもらった。そこで、鈴井本人に直接用があるので来て欲しい、という旨を伝えると、先程の返事が返ってきた。
・・・ 俺たちの苦労は何だったのか。そういえば、鈴井は原作でも前歴持ちの主人公に分け隔てなく接することが出来るくらいのお人好しだったな。などと考えていると、
「ちょ、ちょっと！志帆何言ってんの！」

二つ返事で了承した鈴井に、一緒に話を聞いていた高巻が思わず叫んだ。
「でも、坂本君も司馬君も凄い真剣だし・・・ 大事な用事だと思って。」
いたって普通な様子で鈴井が高巻に返す。
「だからって・・・ っていうか竜司、用事ってなんなの？ 変な用事じゃないなら、今ここで言いなよ。」
高巻が竜司に向かって言う。
「・・・ 言ってもわかんねーよ。」
ボソッと、竜司が小声で呟いた。が、その呟きは高巻には聞こえていたようで、
「はぁ!?言っても分かんない用事って何!? あんた、志帆に変なことするつもりじゃないでしょうね？」
「ばっ、んなわけねーだろ！ お前に用事があるわけじゃねーんだからどっか行ってろよ！」
などと、高巻と竜司の間で言い合いが始まってしまった。
「なんかごめんね。杏、私のこと心配してくれてるみたいで。」
鈴井が申し訳無さそうに言う。鈴井に非がある訳では無いし、友達を思う高巻の気持ちも決して間違っていない。
「いや、こっちこそすまん。事情があって曖昧な説明しか出来なくて。高巻が怒るのももっともだ。」
俺もそう言って鈴井に謝る。とはいえ、どうしたものか。パレスのことを言っても奇人変人扱いされるだけだろう。どうにかして、高巻を説得したいが・・・
「鴨志田の噂のことだ。」
それまで蚊帳の外だった雨宮が、口を開いた。
「え？鴨志田の・・・ ？」
それまで言い合いをしていた杏がピタリと止まり、雨宮の方に顔を向ける。
それを見て、俺が話を始める。
「俺たちの用って言うのは、鴨志田の悪い噂の証拠を見せることなんだよ。ただ、その証拠っていうのが写真とかそういうのじゃなくて、

ちょっと特殊でな。実際にそこに行かないと見せられないんだよ。
鴨志田はバレー部の顧問だろ？鈴井に関係があると思って、見せようと思ってな。」
パレスの内容をぼかしながら、高巻にそう言った。
「鴨志田先生の悪い噂・・・」
鈴井も心当たりがあるようで、考え込んでいる。高巻も心当たりが・・・ というより、悪い噂に巻き込まれている立場のため、ほぼ何の話か理解しているのだろう。
鈴井と高巻はしばらく考え込んでいたが、
「・・・ 分かった。じゃあ私が行く。それで納得がいったら、志帆にもそのことを伝える。それじゃ駄目？」
覚悟を決めたように、高巻が俺に向かってそう言う。・・・ 原作だと高巻がパレスに入るのはもっと後だが・・・ いや、原作の事なんて今更か。鈴井に危険が及ばず、ペルソナに目覚める素養のある高巻がパレスに行くならその方がいい。
「分かった、それでいい。」
俺も考えをまとめ、高巻にそう言った。
「志帆は部活行ってて。終わったら伝えるから。」
「うん。」
そう言って高巻は鈴井と別れる。俺たちは高巻を連れて、そのまま学校を後にした。